

吉田松陰 その大いなる系譜展

展示期間 平成27年1月6日(火)～12月20日(日)

はじめに

長州藩士・杉百合之助の次男として1830(文政13)年に生まれた杉寅之助(後の吉田松陰)は、6歳で山鹿流兵学師範・吉田家の家督を継ぎ、叔父玉木文之進(松下村塾創立者)の厳しい教えを受け、11歳の頃には藩主・毛利慶親に進講するほどの才を発揮しました。その後藩校・明倫館の兵学教授として出仕した松陰は、遊学中の1853(嘉永6)年ペリーの黒船を浦賀に見たその翌年、下田に停泊中のポーハタン号へ赴き密航を企てるも失敗、萩の野山獄に送られました。その野山獄では、松陰妹の文(ふみ)が書物を差し入れるなど献身的に尽くしました。この文はやがて久坂玄瑞に嫁ぎ、久坂が禁門の変で倒れるや、姉・寿(ひさ)と死別した小田村伊之助(楫取素彦)と再婚します。恩赦により獄を出た松陰は松下村塾を引き継ぎ奮闘、1年数ヶ月にして「日本近代の礎」を後に築く多くの同志や人材を育てました。

1859(安政6)年、安政の大獄に連座し松陰は30年という短い生涯を閉じますが、その処刑から34年後の明治26年、31歳の徳富蘇峰は傑作と評され今も読み継がれる伝記『吉田松陰』を発刊します。(明治41年に改訂版)吉田松陰を「日本精神の権化」と敬愛を込めて表した蘇峰は、ジャーナリストとして、また新聞経営者の立場より多くの松陰門下と関係を深めました。

今回の展示では、その交流の一端を書簡を通してご覧いただき、併せて蘇峰が前出著作『吉田松陰』や『近世日本国民史』執筆に当たり、蒐集した松陰関連の資料もご紹介いたします。大河ドラマ「花燃ゆ」の登場人物たちが今に残した筆跡や息遣いなどにもご注目いただけましたら幸いです。

① 吉田松陰コレクション

●吉田松陰直筆の「三余説」(野山獄文稿) 詳しい解説は4頁

●「吉田松陰拝謁詩碑」の原拓

1853(嘉永6)年、プチャーチンのロシア軍艦に乗り込むため、長崎に向かう途中の松陰が、立ち寄った京都で、天皇への崇拜の念と公卿たちの無能さを憂いて詠んだ歌である。山県有稔の為に書かれた詩で、嗣子の山県有朋が宮中に寄贈。1908(明治41)年、吉田松陰没後50回忌に撮影の許しを得て同志に頒布し、京都府教育会がこれを碑にしたもの。

(京都市岡崎・京都府立図書館内に建つ 石碑の裏に野村靖撰文による碑の来历が記されている。)

山河襟帯自然城 東来無不日憶神京

今朝盛嗽拜鳳闕 野人悲泣不能行

上林零落非復昔 空有山河無變更

聞説今皇聖明德 敬天憐民発至誠

鷄鳴乃起親齋戒 祈掃妖氛致太平

從來英皇不世出 悠悠失機今公卿

安得天詔勅六師 坐使皇威被八紘

人生若萍無定在 何日重拜天日明

右癸丑十月朔旦奉鳳闕、肅然賦之。時余將西走入海。

丙辰季夏

二十一回藤寅手録

●吉田松陰の銅像(座像)

●松陰が愛用した「雅号印の印譜」(七種)

(昭和3年10月青山会館に於いて松陰先生遺墨展覧会の際捺印 蘇峰老人)との手書きコメントあり)

「日夕佳」(大小2個) 「吉田矩方」 「子義氏」 「吉田氏藏書之印信」

「吉田」矩方」

② 関係資料

●徳富蘇峰撰書 鎌倉瑞泉寺「松陰吉田先生留蹟碑」の原拓
碑表 松陰吉田先生留蹟碑

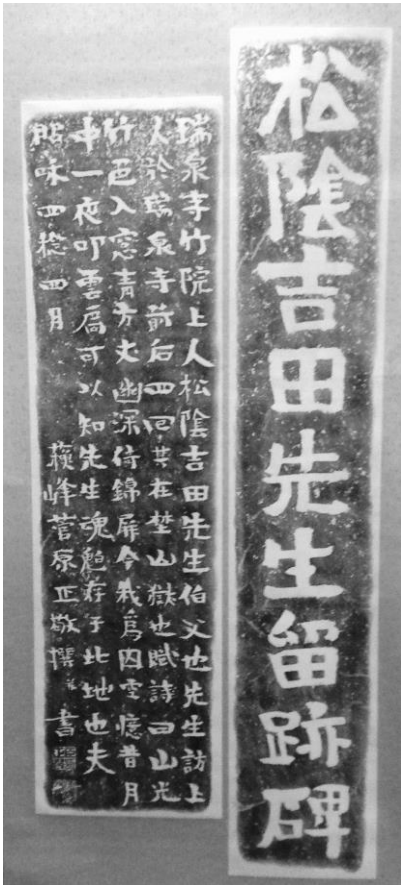
碑裏 瑞泉寺竹院上人松陰吉田先生伯父也 先生訪上人於瑞泉寺前后四回 其在桮山獄也賦詩曰山光竹色入窓青方丈幽深倚錦屏今我為囚空憶昔月中一夜叩雲扃可以知先生魂魄存于此地也矣
昭和四稔四月 蘇峰菅原正敬撰并書

〔本文訓読〕

瑞泉寺の竹院上人は松陰吉田先生の伯父なり。先生上人を訪ふこと前后四回なり。其の桮山獄に在るや、詩に賦して曰く「山光竹色窓に入りて青し方丈幽深錦屏に倚る 今我囚と為りて空しく昔を憶ふ 月中一夜雲扃を叩く」と。以つて先生の魂魄此の地に存することを知る可きかな。

昭和四稔四月 蘇峰菅原正敬撰書を并す

碑は昭和4年に鎌倉瑞泉寺山門前に建築された。その建立に対する吉田庫三の妻・茂子からの蘇峰宛書簡も展示中。



●「佐藤一斎の賛入り 孔子肖像画」

*佐藤一斎 1772～1859 (安永1～安政6)

江戸後期の儒学者 昌平黌の教授となり、幕府の文教の中心的人物となる。一斎の門下には佐久間象山、渡辺華山、横井小楠など幕末に活躍した人物がいる。

●吉田松陰に影響を与えた「三傑人の書軸」

横井小楠 1809～1869 (文化6～明治2)

熊本藩士 儒学者・政治家 維新十傑の一人。通称・平四郎。熊本藩で取り組んだ藩政改革が反対派によつて失敗。福井藩の松平春嶽のもとで政治顧問として活躍、幕政改革や公武合体の推進などで活躍した。明治維新後、新政府に出仕したが耶蘇教徒・共和的思想の持ち主として、保守派により暗殺された。蘇峰の父・一敬は小楠の高弟である。

◆展示書軸

「人心惟危 道心惟微 惟精惟一 允執厥中」

〔詩意〕

現今人心は安定を欠き、道徳心も薄れているが、人間として大切なことは中庸を守るといふことだけである。

佐久間象山 1811～1864 (文化8～元治1)

江戸末期の兵学者・朱子学者・思想家。信濃松代藩士佐久間国善の子。名は国忠、のち啓、通称は修理。妻順子は勝海舟の妹。佐藤一斎に詩文を学び、泰西の書を研究し兵学を講じる。門人吉田松陰の事件に連座し下獄、松代に蟄居した。幕命により上洛し山階宮・徳川慶喜に謁し、時務を講じる。また將軍徳川家茂・中川家にも謁す。京都三条木屋で暗殺された。

◆展示書軸

「得 酒侯書因以詩寄 長簡示流語 還銘顧遇深 論風歎路阻 仰月恨空 陳謝遠歸牯 輟爭暫閑金 萬言難亮意 意亮在知音 佐久間啓具」

〔大意〕酒侯（江戸後期の儒医・書家の渋谷竹栖）の書簡に詩を寄せる 酒侯の長い手紙は酒侯の起居を伝え、私に対する酒侯の情の深さを身に沁みて感じる 酒侯は風が強く私の下へ来られぬと歎じ、空が曇っているのでも月を鏡にして心を通わすことができぬと恨んでいる 私事についての心配は誠に有難い言葉を費やしても私の酒侯への真心は明らかにできないけれども、酒侯の私に対する明らかなことは、私をよく知っていてくれることである。

藤田東湖 1806～1855（文化3～安政2）

幕末の水戸藩士 水戸学藤田派の学者 水戸学の大家として尊皇志士に大きな影響を与えた。安政の大地震のため江戸小石川の藩邸で圧死。

◆展示書軸 「次韻同盟」

●「安政二年 豆州下田湊へ亜墨利加船渡来図」（27×468 cm・上・下巻の上）

1853（寛永6）年、4隻の黒船とともに浦賀にやって来たアメリカのペリー提督は、日本政府に開国を迫った。そして翌年に再び来航し、横浜にて日米和親条約を締結。この条約により下田と函館が開港され、20年以上続いた日本の鎖国が払い解かれた。大名お抱え絵師により描かれたこの「豆州下田湊へ亜墨利加船渡来図」に、下田港の様子や吉田松陰がポーハタン号へと漕ぎ出した弁天島などが見てとれる。

●『吉田松陰』初版（明治26年12月発刊・民友社）

●『吉田松陰』改版（明治41年10月発刊・民友社）

“2度”執筆された『吉田松陰』

徳富蘇峰は人物伝『吉田松陰』を、初版と改版の“二度”にわたり執筆したと言われます。初版は明治26年12月に刊行、蘇峰著作の中でも初期を飾る輝かしい作品となりました。

そして15年後の明治41年10月、改版を発行しますが「修繕と云はんよりも、事実には、新築にも過ぎたる大修繕」と蘇峰が語る通り、大幅に章の削除追加が行われ、別の著作になったとも評されました。同じ「例言」にて「乃木大将の剗切なる怨憑を受けての大修繕だったことを明かし、結果的に松陰門弟重鎮らの満足を得た」の改訂版は、初期版以上の大ヒットとなりました。初版の題字と序を若干31歳の蘇峰は勝海舟に依頼し、その原本が当館に残されています。

●初版『吉田松陰』の勝海舟による題字と序の原本

「余曾見松陰先生於佐久間象山邸第 今閱此書不堪今昔之感
証筆書一言卷首云 癸巳能冬 海舟」

蘇峰は明治26年『吉田松陰』を発行するにあたり、勝海舟にその序文を依頼しました。緒言では「勝海舟翁、佐久間象山と旧交あり 象山は松陰の師而して余亦海舟翁の門下に教を受く 故に翁の題言を請ふて之を篇頭に掲ぐ 亦た因縁なくんばあらず」と述べています。

●『吉田松陰』初版原稿（松陰先生初稿 一―三）

●『近世日本国民史 安政の大獄後編』（民友社版・講談社学術文庫版）

●徳富蘇峰の米寿を祝って刊行された歌集『残夢』より「東湖と松陰」

世は変わり今は東湖も松陰も説く人あらず聴くひともあらず

●徳富蘇峰の書齋に並んだ維新前夜に活躍した志士についての著作本

『神国魂 吉田松陰』村崎毅著（株）学習社 昭和17年

- 『下田に於ける吉田松陰』 福本義亮著 (株)誠文堂新光社 昭和17年
 『人間錬成の吉田松陰』 品川義介著 東水社 昭和16年
 『吉田松陰』 田中惣五郎著 千倉書房版 昭和14年
 『水戸義軍と信濃路』 小林郊人著 水藩志士史跡顕彰会
 『烈公と幕末の水戸藩』 山本秋広著 茨城経済社 昭和30年
 『維新暗殺秘録』 平尾道雄著 民友社 昭和5年
 『藤田東湖伝』 高須芳次郎著 誠文堂新光社 昭和16年
 『藤田東湖全集 第三卷 東湖詩歌集』 高須芳次郎著 章華社 昭和10年

③ 展示書簡

吉田松陰 よしだ しょういん 1830～1859(文政13～安政6)

萩城下松本村の長州藩士・杉百合之助の次男。通称・寅次郎。号は松陰、二十一回猛士など。山鹿流兵学師範である叔父・吉田大助の養子となる。叔父・玉木文之進が開いた松下村塾で学ぶ。11歳の時に藩主・毛利慶親へ御前講義をするなど幼いころより才能を発揮。19歳で藩校・明倫館の独立師範に就任した。21歳で九州遊学の旅に出かけ、肥後では宮部鼎蔵らと親交を深める。22歳で江戸へ出て、西洋兵学者・佐久間象山の塾に入門する。同年宮部らと東北旅行を計画したが、藩からの関所通行手形がなかなか出ないため脱藩を実行。東北視察の後、脱藩の罪で萩に送還。藩士の身分を失った。

藩主の計らいで10年間の諸国遊学の許可が出る。長崎に寄港していたブチャーン率いるロシア艦隊に乗り込む計画で赴くが、すでに出港した後で目的は果たせなかった。安政元年には、下田に再来航していたアメリカ提督ペリーの軍艦ポーハタン号に金子重輔と乗船し密航の意思を伝えるが拒否された。幕府に自首し投獄、松陰だけでなくその師・佐久間象山も連座して投獄された。松陰は国許幽閉を申し渡され、長州萩の野山獄へ幽囚。獄中では囚人たちを相手に「孟子」の講義を行った。

安政2年杉家へ幽囚の処分となり、自宅で「孟子」の講義を再開。叔父・玉木文之進が創始した松下村塾を引き受けて主宰者となり、高杉晋作・久坂玄瑞・伊藤博文・吉田稔麿・前原一誠・山県有朋など、維新の指導者となる人材を育てた。

安政5年幕府が無勅許で日米修好通商条約を結んだことに怒り、老中・間部詮勝の暗殺を計画。これを知った長州藩は松陰を再び野山獄に投獄し、松下村塾の閉鎖を命じる。安政6年安政の大獄により江戸へ送還され、獄中で「留魂録」を書き残す。老中暗殺計画を自供したため、江戸伝馬町の獄にて斬首刑に処された。享年30。

◆展示品 三余説

昔董遇謂 読書當以三余 冬者歲之余 夜者日之余 陰雨者時之余 然歲之有冬 日之有夜 時之有雨 皆天道之常 未足以為余也 吾入獄來 亦得三余 以読書謂 己失義於忠孝 尚仰食於家國 非是君父之余恩邪 己幽身於陰房 尚取照於戸隙 非是日月之余光邪 性已狂悖 多犯大典 質又羸弱 教羅篤疾 有一千此 皆足以殺身 而方且仰余恩 取余光 非是人生之余命邪 凡此三余者 皆董遇之所無 而吾濁得之 雖没身足矣 抑董遇或為農 或為官 徒得其三余 猶足以伝俸於天下後世 況吾得我三余 寧可量哉

松陰生稿

「大意」昔、董遇(三國魂の学者。読書百遍意自ら通ずと云つた人)が、読書は三つの余暇にすべきだといっている。冬・夜・雨の日と。しかしこの余暇は天道の常であり、これは余とは言えない。私は獄に入つて私流の三余を得て、読書をしている。それは君父の余恩と、戸隙からの日月の余光と、病身にある余力とである。董遇は農業をなし、官僚となり、その上三余を得ている。その三余が天下後世に伝わっている程、価値のあるものであるなら、余恩を仰ぎ、余光を取り、余命に読書している私の三余は、はかりしれない程の価値のある三余ではないか

伊藤博文 いとう ひろぶみ 1841～1909(天保12～明治42)

百姓・林十蔵の子。萩の足軽・伊藤直右衛門の養子。幼名利輔、のち俊輔、号は春畝。来原良蔵の紹介で松下村塾に学ぶ。文久3年井上聞多(馨)、遠藤謹助、山尾庸三、野村弥吉(井上勝三)「長州五傑(長州ファイブ)」の一員としてロンドンに留学。西洋列強の実力を体感し、開国・富国強兵論に転じた。翌

元治元年、長州藩による下関での外国船砲撃事件を知ると、井上聞多とともに急ぎ帰国し戦闘回避に奔走する。以後討幕運動に従い、薩長連合成立とともに高杉晋作のもと接薩副使となる。明治維新後は初代兵庫県知事となり、その後は新政府の中枢で活躍。明治18年に初代内閣総理大臣となり、以後、第5代・第7代・第10代と四次にわたり総理大臣として内閣を組閣した。その間、大日本帝国憲法制定の起草に主導的役割を果たし、初代枢密院議長・韓国統監府統監・貴族院議長など数々の要職を歴任。立憲政友会を結成し初代総裁を務めている。明治42年、ハルビンで朝鮮民族主義活動家・安重根に暗殺された。

◆展示書簡 安政5年12月17日付

「来原良蔵宛 伊藤利輔(博文)当時十八歳の書簡」(古谷久綱の鑑定文あり)
私儀昨年已来英学修業仕候儀念願有之候二付き 已ニ去ル御在府中にも御願申出度奉存候得共 未夕道理之学問とても毫髪程も出来候目途も無之 尚且(且つ)国家御多端中御厄害申出候事も奉恐入候段差控能「罷」居今日ニ至り候得とも 只今之躰ニ而碌々能(罷)居候とても往々御奉公之目途も無之就而者何卒御屋敷外へ能「罷」出何レ之師家へなり共入込仕修業仕度奉存候に付「き」既二過ル八月頃桂様迄御願申出御政府御役人様方迄被仰入候得とも所金「詮」君候様御留守ニ而ハ御運び難相成との御事故推而御願も不申出今以打捨「テ」置候得とも 是切りニ仕置候 而ハ素志も難被仕逐千萬遺憾ニ奉打過候間何卒御多端中奉恐怖候得とも可相成儀ニ御座候得ば於御国之御詮儀「議」被仰付候而先年長寄「崎」表之地方但太郎其外修業として被相越来候先例も有之供奉に付 偏ニ御詮儀「議」被仰付候へハ至願之程も逐度奉存候間閣下御慈悲ヲ以御政府御役人中様方被仰入不及高大之望願御逐げさせ被仰下候様奉願上候然「る」上ハ益々精神相し往々御奉公之目途も相立度奉存候當今萬事御多端之折柄斯ク御厄害申出候事も奉恐入候待とも偏ニ御願申出候段御差免被仰付候様奉願上候事
山下新兵衛組 利輔 花押
十二月十七日 来原様 奉呈執事閣下

来原良蔵

1829～1862 (文政12～文久2)

幕末期の志士。福原光茂の三男。長州藩士・来原盛郷の養子。藩校・明倫館に学ぶ。桂小五郎(後の木戸孝允)・吉田松陰らと親交があり、小五郎の妹を妻とした。長崎に赴いてオランダ人から西洋銃陣を伝習。長井雅楽の「開国進取・公武合体」を支持するが、文久2年藩論は攘夷に決定。雅楽の同調者との汚名をそぐため横浜の外国公使館襲撃を計画するがはたせず、同年自刃した。

来原良蔵は、伊藤博文にとって松下村塾入塾を薦めた恩師であり、その後に伊藤は来原の義兄・小五郎の従者となり、長州藩の江戸屋敷に移り住んだ。

梶取素彦(小田村伊之助)

1829～1912 (文政12～大正1)

萩藩医松島瑞璠の次男。萩藩の儒者・小田村吉平の養子に入る。藩校明倫館に学び、江戸に出て安積良斎・佐藤一斎の教えを受ける。安政の大獄で江戸送りとなった松陰から松下村塾を託される。

嘉永6年松陰の妹・寿と結婚。藩主の側近となったことで多忙となり松下村塾に長く関わることはできなくなった。慶応3年藩命により梶取素彦と改名する。明治9年に群馬県の初代県令となり、高崎から前橋に県庁を移転し、製糸業や教育の振興などに尽力。特に閉鎖が検討されていた富岡製糸場の存続に尽力した。妻・寿を亡くした2年後の明治16年、その妹・文(久坂玄瑞未亡人で美和子と改称)と再婚。元老院議員、明治天皇第十皇女の御養育主任、貴族院議員などを歴任し、松下村塾の塾舎の保存にも尽力した。蘇峰は、その著書『吉田松陰』に対して最も理解と感謝をしてしてくれたのは梶取素彦だと後日述べている。

◆展示書簡 (□年□月15日付)

過日ハ美菓吉折御贈下され奉謝候 茲ニ郷産陶器肴合ニ任進呈候 御答謝ノ寸容迄御笑存の誠候 草々又白 十五日 梶取素彦
徳富猪一郎君

やまがた ありとも

山県有朋 1838～1922 (天保9～大正11)

久坂玄瑞の紹介で松下村塾に入塾。藩命により京都・江戸・鹿児島などを巡り、各藩の尊攘派志士と交わった。高杉晋作が創設した奇兵隊に入って頭角を現し、奇兵隊の軍監となる。戊辰戦争では北陸道鎮撫総督・会津征討総督の参謀として転戦。維新後は軍政家として手腕をふるい、日本陸軍の基礎を築いて「国軍の父」と称されるようになった。官僚制度の確立にも精力を傾け、文官試験制度を創設し、後進を育成。日露戦争では参謀総長となる。明治39年公爵となり、以後は表面に出ず元老として政界を操縦した。大正10年の皇太子妃選定問題によって右翼方面から攻撃を受け、失意のうちに小田原の別荘「古稀庵」で没した。

◆展示書簡 (明治41年12月31日付)

貴著吉田松陰を一読したるに先生の性行言論の大より一動一止の微に至るまで其真相を描写表出して毫も遺憾なし 本書は旧著を改訂し殆ど新に起稿せらしものにて其迅速にして精密なる寔に驚嘆の外なし 老生は先生の門下に在りしも先生の事績に於て此書の三分の一も見聞に及ばざりしなり 神州の正気鍾りて此書に在れば実に天下の至幸と謂うべし 豈独り門下生の欣喜措く能わざるのみならずや 閲読の余茲に一言の謝意を表し候 歳年嶢嶢御繁忙相察候 盛壮なる御超歳を祈候 草々不宣
十二月卅一日 椿山莊主 朋 頓首
蘇峰老兄侍史

封筒表 東京赤坂区青山南町六丁目三十番地 徳富猪一郎殿
封筒裏 小田原板橋古稀庵 朋

杉孫七郎 1835～1920 (天保6～大正9)

明治・大正期の政治家。号、松城、古鐘など。長州藩士・植木五郎右衛門の子で、同藩士・杉彦之進の養子となった。藩校明倫館に学び、吉田松陰の薫陶も受けた。文久1年、藩命により幕府の遣欧使節・竹内保徳に従い欧州を視察した。元治1年の四国(英仏蘭米)連合艦隊による下関襲撃に際しては、井上馨らと共に戦争回避に尽力。維新後、山口藩権大判事、宮内大丞、秋田県令を経て、明治6年再び宮内大丞となり、以後宮内少輔、宮内大輔、皇太后

宮大夫など宮中の要職を歴任した。20年子爵となり、30年枢密顧問官、41年議定官に任ぜられた。能筆家としても有名。

◆展示書簡

御殿場滞在中にて
おふじ山白粉つけてかおなして園遊会の客を迎へり
井上侯同年の古鐘

封筒表 明治43年11月 杉子爵画 興津井上侯(井上馨)園遊会にて

乃木希典 1849～1912 (嘉永2～大正1)

長州藩士・陸軍大将・伯爵。吉田松陰に心服し、伯父玉木文之進の門に入る。萩の乱、西南戦争に従軍。川上操六とドイツに留学し軍制・戦術を研究。台湾総督を経て日露戦争には第三軍司令官として旅順攻略を指揮。戦後、軍事参議官・学習院院長となる。大正元年、明治天皇御大葬の当日に妻と共に殉死。

◆展示書簡 (明治41年5月25日付・葉書)

拜啓過日の御書面に付 早速吉田庫三氏へ申遣シ同氏一昨夜来呉々明日迄には送越候筈又拝借読了候間併せ可差出延引の段御詫迄如此段候儀御免を乞
五月二十五日 乃木希典

野村靖 1842～1912 (天保13～明治42)

幕末・明治期の志士・政治家。長州藩士・野村嘉次郎の子、入江九一の弟。伊藤博文の最初の妻・すみ子は妹。

安政4年吉田松陰門下に入り、のち尊王攘夷運動に挺身。文久2年御殿山イギリス公使館焼打ちに加わる。禁門の変のち御楯隊を率いて藩の内戦、幕長戦争に参加。維新後は宮内大丞、外務大書記となり岩倉具視らに随行して欧米に渡る。帰国後神奈川県令、逓信次官をへて、駐仏公使などを務めた。晩年は皇室の養育掛長を務めた。遺言により吉田松陰の墓域内に埋葬された。松陰が処刑される前に記した「留魂録」は松陰と牢中で起居をともした沼崎吉五郎が大切に保管し、明治9年に神奈川県県令の野村に渡されたものであ

◆展示書簡（明治41年8月28日付）

マシニイ「ジヨゼツペ・マツツイーニ・イタリア統一の三傑の一人」に関する二章
御勇割之由猛奮之蜂可想

○小生老母へ先師より遣わされたる書は三月十一日なるべし

○小生捕縛せられて萩に遠送せられしは三月下旬かと覚え候 其日は忘れ
申候 追懐録を御一閲下さるべく候

○小生兄の揚屋日記なるものあり 未だ尊覧に入れず、之を御一覽候て御
参考に為し下され候わば本懐之至に候 小生御供にて帰京之時は、来月十
日前後なるべし。其節御手許へ差出すべく候 頓首

八月廿八日 靖

徳富学兄函丈

封筒表 東京赤坂青山南町六丁目三十番地 徳富猪一郎殿

封筒裏 相州宮の下 野村靖

よしだ くらぞう

吉田 庫三 1867〜1922（慶応3〜大正11）

吉田松陰の妹・千代（芳子）と児玉祐之の息子として長州藩に生まれる。吉田
松陰が刑死後、安政の大獄大赦によって再興された吉田家を、11歳の時に第
11代として相続。萩の松陰神社の毎年の例祭に祭主を務めた。

吉田松陰が創立した松下村塾に7歳の時に入り、大叔父の玉木文之進の教え
を受ける。12歳でその課程を終えた後は、私塾西鄙齋で学び、明治15年、15
歳の時に上京して二松学舎に入学し、2年間、漢学を学んだ。22歳の時に学
習院で初めて教鞭をとった。以後、高等師範学校中学科、陸軍幼年学校等で
教え、明治28年従七位を授与された。明治30年から商船学校（現東京海洋
大学）で教えた後は、鳥取県第一中学校（現鳥取県立鳥取西高等学校）、神奈
川県第二中学校（現神奈川県立小田原高等学校）、神奈川県立第四中学校
（現神奈川県立横須賀高等学校）の校長をそれぞれ歴任する。

明治42年には、蘇峰の民友社より『松陰先生女訓』を出版している。乃木希典
と吉田家は親戚関係にあり、生涯に渡って親交があった。乃木が日露戦争旅
順攻撃の際に得た漢詩『金州城外の作』は、第二中学校長吉田庫三宛に送った
一枚の葉書に記されたのが世に出た初めてのものである。

◆展示書簡（明治41年11月4日付）

拝呈高著早速御寄示成下され口手揮処即夜通読致候 今更高著に対して
批評すべき詞は無之候へとも生の最敬服且驚喜致付仁兄の松陰研究に於る
御識見大進歩成下され御事にて実に仁兄の精微周密なる観察は流麗にし
て簡明なる文章と相待ちて欲深き生の目にも曾祖の人物を遺憾なく發揮
せられ大なるものと拝見致候 其の真偽は天下後世二見るへからざる事と
断念羅在候処 恰も五十年祭二当たりて此の好著を得候は無上の快心事
に御坐候 先は読余匆卒笔筆妄言高怒下され度 書外万拜晤奉期候 拜
具

曾祖五十年祭の前五夜 庫三

蘇峰仁兄大人 侍史

封筒表 東京京橋日吉町民友社 徳富蘇峰先輩 侍史

封筒裏 ヨシカ市仕野一五二 吉田庫三

蘇峰は『吉田松陰』の改訂版を出版するに際して、吉田家当主の吉田庫三か
ら資料の提供を受けていた。手紙では、松陰の没後五十年祭に当たって改訂版
が出たことは「無上の快心事」であるとその喜びを伝えている。

○『松陰先生女訓』吉田庫三編（明治42年6月発刊 昭和4年改版・民友社）

よしだ しげこ

吉田 茂子（吉田庫三の妻）

吉田松陰は、安政元年（1854）、下田で密航を企てる直前に、鎌倉瑞泉寺の
住職であった母方の伯父にあたる第二十五世住職竹院和尚に会いにきたとい
われる。密航に失敗した松陰は獄中、瑞泉寺を訪れた詩を詠じた

山の青々とした竹の光が窓から射し込んでくる。方丈は奥深く、錦屏山の
懷に抱かれて物静かである。いま私は囚われの身となって獄中にあり、むな
しく苦しみを味わっている。ある夜夢に瑞泉寺を訪ねた

昭和4年12月3日付、吉田茂子からの手紙は、瑞泉寺の石碑建立の際に蘇
峰が尽力してくれたことに対する礼状である。

瑞泉寺山門の前に建てられた石碑「松陰吉田先生留跡」（昭和4年建立）は、

徳富蘇峰の筆によるものである。(石碑の原拓展示中)

◆展示書簡 (昭和4年12月3日付)

謹みて申上候 昨日はいろいろ御厄介様に相成難有厚く御礼申上候 此度は石碑建立につき一方ならぬ御力尽しいただき何とも御礼の申上様も無之候 御蔭さまにてかくれたる遺跡をして永く世に紹介して頂き誠に悦ばしく感謝いたし居り候次第にて先生の霊もさぞかし御満足の事とぞんじ上候 只々残念に感じ候事は先生の愛妹児玉芳子並に先生の為には何ものをもいとわざりし吉田庫三とのよろこびを共になし得ざりし事に御座候 右不躰をかえりみず書中御礼申出候 向寒の候折柄自重遊ばされ候様いの上奉り候 かしこ

十二月二日 吉田茂子

徳富先生 みもとに

封筒表 大森山王 徳富先生 御直披

封筒裏 青山原宿一七〇の六号 吉田茂子

長州五傑(長州ファイブ)

*伊藤 博文 いとう ひろぶみ 1841~1909 (天宝12~明治42)

◆展示書簡 (明治35年6月23日付)

拝啓 益御清適奉賀候 陳ば明日午後五時赤坂三河屋に而小集相催候間御閑暇に御坐候はゞ御来車成下され度奉待候 草々敬具
六月廿三日 博文
徳富猪一郎殿

封筒表 赤坂区青山南町六丁目三十番地 徳富猪一郎殿

封筒裏 明治卅五年六月廿三日 侯爵伊藤博文

*井上 馨 いのうえ かのる 1836~1915 (天保6~大正4)

幕末・明治・大正期の政治家。長州藩士・井上光亨の次男。幼名勇吉、のちに

聞多。号は世外。

藩校・明倫館で学び、岩屋源蔵に師事して蘭学を学んだ。万延元年小姓役となり、藩主毛利敬親と世子定広の側近に仕えた。尊王攘夷を主唱し、文久2年高杉晋作らと外国公使館襲撃を企てた。翌年伊藤博文、山尾庸三らとイギリスへ密航するが、その留学中に国力の違いを目の当たりにして開国論に転じ、翌元治元年の下関戦争では伊藤と共に急遽帰国して和平交渉に尽力した。帰国後木戸孝允らと薩長連合に奔走する。維新後は新政府参与となり外交・財政の衝に当たる。三井をはじめ、実業界とも深いつながりを持ち、鉄道事業などにも関与。伊藤内閣の外相・内相・蔵相を務めた。鹿鳴館に象徴される欧化政策を展開し、不平等条約の改正に奔走。引退後も元老として重きをなした。

◆展示書簡 (明治43年2月1日付)

尊翰拝読 貴新聞満二十年紀に付祝意之句差出候様御申越成下され 如御承知老耄且実には愚筆に候得共 応命両句案出差し申候 多分世人一笑に帰し申すべく 御熟考之上紙上に出版之許否は篤と御考慮之上御裁断成されたく候 不顧赤面持せ差出し候間御笑留下され度候 草々頓首
二月一日 馨

徳富猪一郎様

封筒表 徳富猪一郎殿 馨

*山尾 庸三 やまお ようせう 1837~1917 (天保8~大正6)

明治期の政治家。長州(萩)藩士・山尾忠治郎の次男。周防国(山口県)小郡に生まれ吉田松陰らに学ぶ。嘉永5年江戸に上り、文久1年には幕臣北岡健三郎と共にロシア領アムール川流域の査察を行う。翌2年高杉晋作らとイギリス公使館焼き打ちに参加、さらに翌3年長州の軍備強化の目的もあつて、伊藤俊輔(博文)、井上聞多(馨)、遠藤謹助、野村弥吉とイギリスに密航(長州五傑・長州ファイブ)。ロンドンからグラスゴーに渡り、工業技術、造船技術を学んで帰国。新たに創設された法制局の初代長官を務めた。のちの東京大学工学部の前身となる工学寮を創立。

ろう者の人材教育に熱心に取り組み、明治13年に楽善会訓盲院を設立した。

その後工部省を退き、宮中顧問官、法制局長官などを歴任、20年子爵に任じられた。

◆展示書簡（明治34年9月14日付）

拝啓時下残暑の砌に候得共益御清適大賀仕候 陳者来る十六日租酒差上度且つ同時伊藤侯一行の送別をも相催し度と存候間 同日御操合之上午後五時赤坂新坂町木戸孝正宅へ御光来下されたく此の段御案内申進候 敬具

九月十四日

山尾庸三・木戸孝正・広沢金次郎・前島彌

追て御来東の有無御一報願上候

徳富猪一郎殿

明治34年9月14日付の手紙は、山尾庸三、木戸孝正、広沢金次郎、前島彌の連名で、伊藤博文の渡露送別会へ蘇峰を招待する内容である。

*木戸孝正は木戸孝允の養子で、来原良蔵の長男。

*広沢金次郎は維新十傑の広沢真臣の子。妻は山尾庸三の娘。

ことう つねきち

厚東 常吉

1884～1968（明治17～昭和43）

山口県会議長・衆議院議員・萩商工会議所会頭・松陰神社改築奉賛会長などをつとめた政治家・実業家。萩の名宿「常茂恵」の創設者。松陰神社の復興・再建に尽力し「雷鳴」の異名を持つ。その功績により松陰神社内に銅像が建つ。書簡中にある松下村塾開塾百年式典で披露された蘇峰の賛辞の草稿も展示中である。

◆展示書簡（昭和31年8月25日付）

残暑の折柄先生には如何御起居遊ばされ候や御伺い申上候扱てかねて御存知の通り去る廿二日松下村塾開塾百年記念式を挙行無事終了致申候 当日神前に供えし御神饌別便にて御送付申上候間何卒御受納下され度候 尚過日はわざわざ松陰先生に関する賛辞御恵送下され辱く存じ奉り厚く御礼申上候 式は改築の松陰神社々殿に於て厳肅裡に報告祭を行い式後 学校生徒の松陰先生に関する感想発表及び松陰全集編纂委員たりし玖村

山口大学教育学部長の講演を行い、その席上先生の賛辞を熊野委員長 9

（松陰先生百年祭準備委員会）朗読致し聴衆一同深き感銘を享け申候 辞

中に昭和十年先生来萩の記事あり当時の史跡産業博覧会は不肖が微力を

振つて主唱開催せしものにて當時を追憶して懐旧の情一段と切なるものあ

り 当時撮影せし先生の写真を見出し一葉封入致し御高覧に供し申し候

三年後の松陰先生百年祭には是非とも先生の御来萩を皆々鶴首熱望致し

居候 申すも愚かに候えども何卒御加養御長寿の程道の為め国の為祈り奉

り候 八月廿五日 匆匆頓首

松陰神社改築奉賛会長 厚東常吉

徳富蘇峰先生虎皮下

封筒表 静岡県熱海市伊豆山 徳富蘇峰先生

封筒裏 山口県萩市松陰神社改築奉賛会長 厚東常吉

「松下村塾開塾百年式典で披露された蘇峰の賛辞の草稿」

松陰先生は維新回天の急先鋒であるばかりでなく、近世日本に於ける大教育者である。先生の松下村塾に主たる先生一生涯三十年の十分の一にもたらない。然も先生の誨を受けたる青年の数も多からず。其の期間も亦た短し、然も彼等は先生によりて其の全人格を養成し、其の真骨頂を打ち出した。先生其の人も教課書である。先生の言行其物が教材である。先生の精神、気魄力靈火となりて彼等の心に熱と光とを与えた。曾て昭和十年四月末、予は山口県教育会の招に応じ、萩市に赴き松下村塾を訪う。其の眼前の感興を左の二十八字に綴った

柱頭歴々認刀傷(柱頭歴々刀痕を認む)

堪想当年国土魂(想うに堪えたり当年志士の魂)

花落東光寺畔路(花落つ東光寺畔の路)

松陰夫子讀書村(松陰夫子書を読むの村)

今や村塾創立百年祭に際し、山口県の諸君有志 予に一言を徴せらる。予今や老且病 言わんと欲するところ山の如く多きも力克わず。唯だ我が国九千万同胞中、先生の報国殉道の大節に対し、奮発興起する者あるを翹首企足して待つものである。而して唯だ此時を最も然りとするものである。

昭和卅一年七月念六

火国後学蘇峰豪叟 頽令九十九又四

すぶ こうへい
周布 公平 1851～1921 (嘉永3～大正10)

長州藩士・周布政之助の次男・嫡子。神奈川県知事、兵庫県知事、山県内閣書記官長、貴族院議員。

吉田庫三を神奈川県下2校の校長に推したのは、当時神奈川県知事であった周布の功績といわれる。

◆展示書簡 (大正3年5月27日付)

拝啓御尊父一敬殿御病気の所御保養不被為叶 遂御逝去遊ばされ候段御通知に接し驚入哀悼の至りに堪えず候 貴殿はじめ御■様嘸々御愁傷の御事に奉為察候取り敢えず書中以て御悔申上候 敬具

五月二十七日 周布公平

徳富猪一殿

封筒表 青山南町六ノ三〇 徳富猪一 郎殿

封筒裏 周布公平

すぎ みちすけ
杉道助 1884～1964 (明治17～昭和39)

第二次世界大戦後における大阪・関西財界の代表者。曾祖父は吉田松陰の父である杉百合之助。祖父は吉田松陰の兄にあたる杉民治。八木商店社長となり、大阪商工会議所会頭を23年間務め、日本商工会議所副会頭、新日本放送(現・毎日放送)社長、海外市場調査会(現・日本貿易振興機構(略称JETRO))シエトロ)を設立後、理事長となる。鳩山一郎内閣において日ソ交渉全権顧問、日韓会談首席代表として政界にも関与した。

◆展示書簡 (昭和16年4月18日付)

徳富猪一 郎殿 侍史

杉道助

拝啓松岡洋右氏の懇憑によりて吉田松陰書簡集の撮影写真を作りましたから一部差上げます。此の原本は山口県明木瀧口家の秘宝であります。岩田博蔵氏、岡本一郎氏の御配慮にて瀧口吉繼氏の御厚意ある御快諾を得て写さして頂きましたのであります。五十五部作りまして吉田松陰に関係ある方々に御預けしたのであります。右御案内迄

追而貴台には未だ拝眉の栄を得ませんので、私自己紹介を致します。私は杉民治(梅太郎)の嫡孫であります。現在の仕事は株式会社八木商店社長でありまして傍ら大阪商工会議所の会頭を勤めて居ります。

先生は御記憶はありますまいが、私青年時代先生には明治四十三年興津の井上侯邸にて御目に懸り、又二十四五年前、松陰の愛誦せる太宰春臺の産語中の一節を書いて戴きましたことがあります。

封筒表 東京市大森山王 徳富蘇峰様 侍史

封筒裏 大阪市住吉区万代西一丁目四五 杉道助

④日本画に描かれた花と植物コレクション

かわばたりゆうし

川端龍子(1885～1966 和歌山県生)

本名・昇太郎。日本画家。大作主義の「青龍社」を旗揚げ。文化勲章受章。このサイズ100号の「蘇峰立像」は、蘇峰の米寿を記念して描かれた。

「蘇峰立像」 1957(昭和32)年 蘇峰画賛

ふくだびせん

福田眉仙(1875～1963) 兵庫県相生生)

久保田米僊や橋本雅邦に学ぶ。後に師となる岡倉天心からは南画(文人画)の復興を託された。画境は写実主義。

「紅梅」 1948(昭和23)年 蘇峰画賛

のみわじよゆうし

野沢如洋(1865～1937 青森県弘前生)

本名・三千治。京都で今尾景年に学ぶ。山水、馬などの水墨画を得意とした。文展審査員に任命されるも辞退、生涯反官展主義を通した。

「竹」 1937(昭和12)年 蘇峰画賛

やまもとあつげつ

山元桜月(1887～1985 滋賀県生)

13歳で叔父の山元春拳の門に。昭和4年より無鑑査出品。桜月独自の清澄幽玄な画風は、横山大観の絶賛を受けた。

「朴の木」 1942(昭和17)年 蘇峰画賛

✽吉川朝衣

湘南地方の美術教師を務める傍ら、安田靉彦に師事。歴史画や動物画、植物画を得意とした。

「菊」 1946(昭和21)年 蘇峰画賛

✽平福百穂

東京美術学校卒業後、結城素明らと自然主義的写生画を目指す。国民新聞時代には、蘇峰の寵愛を受ける。岩波書店の壺形マークは平福のデザイン。

「椿」(屏風)

✽麗子「林下美人」 1948(昭和23)年 蘇峰画賛

✽吉川朝衣「鳥兜図」 1946(昭和21)年 蘇峰画賛

✽吉川朝衣「空木」(うつき)「(屏風)

✽歌川広重

本名・安藤鉄蔵。浮世絵師。かつては安藤広重とも呼ばれた。ゴッホやモネに影響を与えた世界的に著名な画家。「ヒロシゲブルー」で有名。

「花見」

✽山元桜月「桜葉富士山」 1942(昭和17)年 蘇峰画賛

参考文献

- 『吉田松陰』徳富蘇峰著 (初版版・改訂版)
- 『蘇峰とその時代』高野静子著 中央公論社 昭和63年
- 『続・蘇峰とその時代』高野静子著 徳富蘇峰記念館 平成14年
- 『コンサイス日本人名事典(第4版)』(株)三省堂 平成13年
- 『大人名事典』平凡社 昭和28年
- 『徳富蘇峰記念館所蔵 民友社関係資料集 別巻』昭和60年 (株)三一書房
- 『徳富蘇峰関係文書』近代日本史料選書7-1 伊藤隆・酒田正敏・坂野潤治他編 山川出版社 昭和57年
- 『徳富蘇峰関係文書』近代日本史料選書7-2 酒田正敏・坂野潤治他編 山川出版社 昭和60年
- 『徳富蘇峰関係文書』近代日本史料選書7-3 酒田正敏・坂野潤治他編 山川出版社 昭和62年
- (共編者)ジョージ・秋田、有馬学、有山輝雄、板垣哲夫、梅沢ふみ子、梶田明宏、高野静子、柴崎力栄、照沼康孝、鳥海靖、成田賢太郎、広瀬順皓、福地博、三谷博、村瀬信一、山室建徳
- ・京都府立図書館ホームページ・萩松陰神社公式ホームページ・ウィキペディア

平成27年2月10日発行

編集 塩崎 信彦 宮崎 松代

発行者・発行所 (公財)徳富蘇峰記念塩崎財団 代表理事 高野 信篤
〒251-0123 神奈川県中郡二宮町二宮 605

TEL 0463-71-0266 FAX 0463-71-0677

ホームページ <http://www.soho-tokutomi.or.jp/>